

共生の美学へ

-インドネシアでの国際交流成果報告書-

彫刻学科教授 笠原恵実子

2025年10月26日より11月4日にわたって行われた彫刻学科の国際交流プログラムは、インドネシアのグッドスクールで行われた。参加学生は学部4年生4名と大学院1年4名、大学院2年2名の10名、付き添いは教員1名の合計11名であった。

<インドネシア渡航の動機>

私は以前、インドネシアの非営利コレクティブ、ルアンルパによってキュレーションされたドクメンタ15（2022年）を鑑賞し、世界のアート・シーンにおける大きなパラダイムシフトを体感した。それまでドクメンタのキュレータがグループであったこともアジア系であったこともなく、その企画内容及び方法は、明らかに欧米中心の美術史を脱構築しようとする挑戦に満ちていた。展覧会参加者の国籍や経済環境の偏りは深く考慮され、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ・オセアニアから、多くの無名コレクティブが紹介された。そのことによって、ドクメンタ15は、貧困やフェミニズム、ドラッグ問題、歴史的改ざんなど、世界に蔓延る様々な問題が表出され、また、それらが観客に広く開かれた状態で共有される場となり、力強い展覧会となった。ルアンルパがグッドスクールというアートセンターの運営に関わっていることは周知されており、私は今回の海外研修の機会を得て、真っ先にルアンルパのメンバー、かつ山口情報芸術センターのキュレーターであるレオナルド・バルトメウス氏にコンタクトをとり、インドネシア渡航を計画した。

<グッドスクールとは何か>

上述したルアンルパと、セラム、グラフィス・フル・ハラという三つのコレクティブが共に運営するのがグッドスクールである。コレクティブのコレクティブといった構成のグッドスクールは、アートが社会や政治、様々な学問分野と繋がり、公共に開かれていくことを、教育を通して伝授する場所である。その鍵となるのが、ドクメンタ15でも掲げられた、インドネシア語を由来とする、下記の4つのキーワードである。

1、ルンブン（Lumbung）/共同米倉を意味し、収穫した米をコミュニティで分かち合うために、歴史的にインドネシアで行われてきた公共政策。

2、ノンクロン（Nongkrong）/仲間と一緒にお茶をしながらおしゃべりすること。

3、マジェリス（Majelis）/集会を意味する

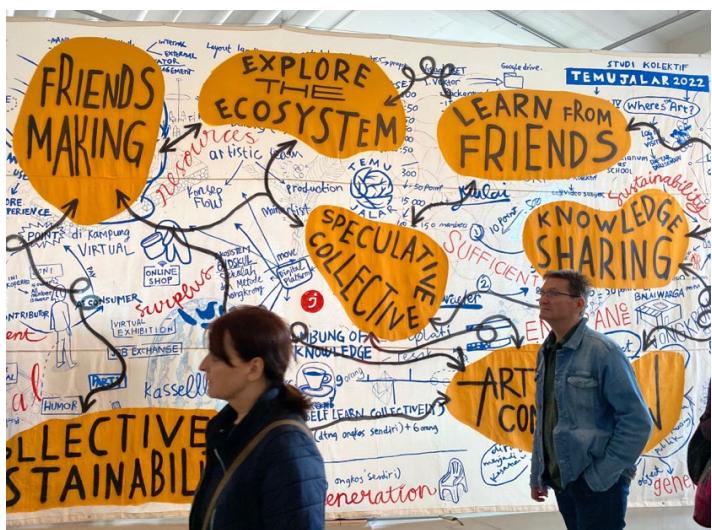
4、ハーベスト（Harvest）/ノンクロンやマジェリスを通して生まれた新しいアイディアや共有された知識などを収穫し、ルンブンへと貯蔵される。

これらのキーワードを用いながら行われるグッドスクールのクラスは、美術の作品本体よりも、その作品に至る対話やプロセスにおける人々の関わりに目を向けた内容である。そして、アートの生成を通して、強者が動かす現代の社会のあり方を変え、人々がそれぞれ

の営みを行いながら、お互いを共有する時間や場を持ち繋がっていき、そこから得た収穫物を共同体へと還元するエコシステムの構築が目標とされている。

<今回の国際交流の目的>

企画目的は、学生達がグッドスクールにおけるアートを介した社会実践を体験すること、そして、その発想の由来であるインドネシアの文化を肌に感じることであった。旅程前半はジョグジャカルタに赴き、現地に残るゆったりしたノンクロンの生活習慣を体感し、世界遺産の仏教遺跡ボルブドゥールとヒンドゥー教遺跡プランバナン寺院群を中心に訪問し、インドネシア文化に古くから根ざす共生の思想について学ぶ。後半は首都ジャカルタに赴きグッドスクールのクラスに参加、学生がそれぞれのアートや社会との関わりを再考察する機会とした。



documenta15 展示風景

<日程順の活動内容>

・10/26-7 羽田空港出発、ジャカルタ到着、ジョグジャカルタへ移動

羽田深夜便搭乗のため早朝にジャカルタに到着し、その後飛行機を乗り換えてジョグジャカルタへ向かう。心配したビザなどの申請は事前取得で全く問題がなかった。到着後荷物をホテルに預け、プランバナン寺院群に赴き見学した。

プランバナン寺院群は9世紀のヒンドゥー教寺院のプランバナン寺院を中心とした遺跡群で、ユネスコ世界遺産に登録されている。（写真1、2）プランバナン寺院はヒンドゥー教の三大神であるシヴァ、プラマー、ヴィシュヌに捧げられ、それぞれの祠堂が建立されている。最大のものはシヴァ堂で、47mの祠堂上部には、シヴァを象徴するリンガ（男根）の装飾が無数に施されており、回廊には叙事詩「ラーマーヤナ」の42場面がレリーフで描かれている。イスラム教徒が多数派となった現代インドネシアであるが、Javaでもヒンドゥー教が支配的であった時代の美意識を見ることができる。寺院は、蟻塚のような彫刻的形状が連なり、日の光の下で美しい。散策していると、当時の共同米倉＝ルンブン（Lumbung）の遺跡を発見した。



写真1、2 プランバナン遺跡

・10/28 ジョグジャカルタ市内見学

ジョグジャカルタはインドネシアの中でもイスラムの王制が残る特別行政区である。そのため、古くから続くイスラム王宮の遺跡タマン・サリや、現在の宮殿などが観光スポットとして人気ある。ホテルから歩いて行ける距離にあるこれらを見学するために、街並みや人々のそこで働く様などを体感するために、あえて市内を歩いて移動した。古くから残る小道には、日本の棟割長屋のように狭い道を隔てて家が連なり、コミュニティーとして成熟している様が窺える。皆が気持ちよく暮らすように、清掃や街の美観を心がけており、各所に置かれた鳥籠や植木鉢が置かれ、それらとマッチするように家の色が塗られていた。車は通り抜けできず、自転車とバイク、歩行者のみの路地だ。(写真3)

インドネシアには、笑みを絶やさない人が多い。大きな声で威圧的に話をする人も少ない。遠慮がちにアイコンタクトをとってから、こちらに話しかけてくる優しさを感じた。経済的に考えれば、日本や中国、韓国よりも平均収入は低いが、人々の幸福度はこちらの方が高いように感じられ、美しい路地を歩きながら、経済効率や生産性を追い求める社会と幸福度について皆で話をする。その後明らかにジョグより都会で現代的であるジャカルタに移動し、多少印象は変わったものの、それでもゆっくりとストレスなく人とコミュニケーションを取ろうとするインドネシアの人々から学ぶところは大きいと感じた。

タマン・サリは水の宮殿と言われる、18世紀にマタラム王国のスルタンが離宮とした歴史的建造物だ。ピンクみを帯びた石造りで、水路や複数のプールがあり美しい。(写真4)

タマン・サリ周辺には城下町のように小さな店が連なる地域があり、インドネシア名産であるバティック生地を生産・販売する店や、ジャコウ猫のコーヒー「コピ・ルアク：Kopi

「Luwak」（コーヒー豆を猫に食べさせ、糞と共に排出された豆で作ったコーヒー）を売る店が多かった。夜には皆でインドネシア料理を食べに出かけた。それぞれが様々な料理をオーダーし、どの料理も美味しく、インドネシアの食文化の深さに感動した。



写真3 美しい街の路地



写真4 タマン・サリ

・10/29 ボルブドゥール遺跡群見学

7世紀の仏教遺跡ボルブドゥールは、日本においては法隆寺と同時期にあたる世界最大級の仏教遺跡で、ユネスコの世界遺産に認定されている。

遺跡公園内は丁寧に管理され、まず、園内に併設されたバスで、遺跡近くの事務所まで移動する。そこで観光客は皆、草履のようなサンダルに履き替え、ガイドとともに遺跡内に入ることとなる。石造りの遺跡は急な階段が多く、また雨が降り出したこともあり、サンダルでは足が不安定な気がし、「この石階段で足を踏み外して落ちたら結構大変になるだろうな」と考えるが、現地の人々は皆スタッタと歩いて行く。前日訪れたヒンドゥー教遺跡ブランバナンとは異なり、大乗仏教の理念が形となっている。5kmにもおよぶ回廊には、仏教説話に基づいた天人や羅刹天、特徴的な鳥獣や植物文様などの素晴らしいレリーフが時計回りに続く。

直径50m程の丘に盛土をし、その上に200万個ほどの石のブロックを積み上げて構築されたブランバナン遺跡は、内部空間を持たない。仏教における三界、「欲界」「色界」「無色界」の三つを下から積み上げたような構造になっており、「無色会」を示す遺跡の頂上で行くと、そこから見渡せる一帯の景色は禅定に達した世界と重なり、穏やかで達成感のある素晴らしいものだった。また、ボルブドゥールの形状はストゥーパ（釈迦の遺骨・遺物をおさめる建造物）になっている。全部で72基のストゥーパが三層に配置され、最上層の最大のストゥーパ、天上へとつながる。(写真5,6,7,8)



写真5、6、7、8 ボルブドゥール遺跡

・10/30 ジャカルタへ移動

ホテルをチェックアウト後、夕方までを自由時間とし、各々が散策やショッピングなどをしながらジョグジャカルタを惜しむ。その後車2台で空港へ向かいジャカルタ行きの飛行機に乗る。便の時間変更もあり、ジャカルタには夜22時近くに到着、車でホテルに向かいそのまま就寝する。

・10/31 グッドスクール初日

グッドスクールの初日授業の準備として、学生たちはあらかじめ、「自分にとって大事なもの」を一つ持ってくるようにと、本プログラムと共に練り上げたグッドスクール側担当者ジェイジェイ（写真9）より事前に伝言されている。公共交通機関は発展していないインドネシアではアプリを使って車を呼ぶのが通常なのだが、ホテルから近い距離のグッドスクールへ行く車は、低運賃ゆえに探すのが困難で、結局30分ほどの時間がかかる。

グッドスクールは元々フットサルの室内競技所を、貨物用コンテナボックスを支えに改築した構造で（写真10）、開放的なクラスルームやラジオ放送が行われる部屋、図書室、個別のスタジオなどが複合的に組み合わされている（写真11）。日本だったら建築許可は降りな

いに違いない、手作り感満載な場所だが、とても感じがよく居心地がいい。近所の猫たちも集まりゴロゴロしている（写真12）。私達が着くと、すでにインドネシア料理の昼食が用意されていて、（写真13）それを食べながらノンクロロンしていると、徐々に人が集まってきてクラスが始まった。最初のクラスでは、グッドスクールの現在に至るまでの経緯が紹介された。報告書冒頭でも書いたが、ルアンルパの他、二つのコレクティブと共にグッドスクールは作られている。インドネシアでは多くのアーティスト達がコレクティブに所属し、協働して作品制作や社会的プロジェクトを行うという。各々の負担が軽減され生産性が上がるだけでなく、メンバー同士が経済的に支え合う方法もあるという。ルンブンに代表される歴史的共生のアイディアが強く生きているのだ。グッドスクールの関係者は、横軸で水平な関係をメンバー間に保つことが重要だ、という。しかしそのために、多くの時間が、ノンクロロンやマジエリスに割かれるというデメリットもあるのだが、それでも、一人の強者でなく、皆が平等に物事を決めていく事に意味があると言う。

ひと通りグッドスクールの活動やインドネシアのアート状況についてのレクチャーを聞いた後、ブレイクを挟み、皆がお茶や食事をとりながらノンクロロンし、次のクラスへと移行する。学生達が日本から持ってきた「自分にとって大事なもの」の紹介が始まった。友達からもらったプレゼント、大事な写真、制作道具など様々なものがあり、それらについて説明するうちに、自然と自己紹介をしてしまう。その後、学生たちはグッドスクールいるインドネシア人たちとグループを組み、さらに深く自分について話をするセッションを行い、最後に説明を聞いたインドネシアの人々が学生たちについて紹介をする、という伝言ゲームのような内容だった。（写真14、15）半数以上の学生があまり英語を話せない中で、話す側も聞く側も知恵を絞って理解しようとする努力によってコミュニケーションは問題なく行われ、大きな笑いを呼ぶような場面も多く見受けられた。クラス後はそのまま初日のオープニングパーティーへと繋がっていき、皆で一緒に夕飯を食べた。敷地内に併設されているアーティスト・イン・レジデンスで制作をしているアーティスト達や、居合わせたインドネシアの美大生なども参加し、会話の輪が広がっていた。



写真9 プロジェクトを共に考案したJJさん

写真10 コンテナを構造に用いた建築

写真11 下フットサル場の開放的クラスルーム



写真 12 近所の猫が集まつくる

写真 13 初日のランチ



写真 14、15 「自分にとって大事なもの」を用いた自己紹介を行うクラスの様子

・11/1 ワークショップ 2日目

グッドスクールに向かうと昼食が用意されており、それらを食べながらノンクロンしていると、徐々に「Spatial Project」のクラスが始まった（写真 13）。スペースの使い方や建築とアートの接点など、空間に対する思考体系についてのレクチャーであり、インスタレーションを考える上でとても参考になる内容だ。建築的空間をテーマに始まった話は、都市空間へと移行していく、最後には都市空間で見かける、廃棄物から再生産されるオブジェの話へと導かれていった。インドネシアのみならず様々な発展途上国の中でも頻繁に見かけるセルフメイドの造形物、例えばバケツや雨桶、ホースを合体させ家に雨水を引き込む突飛な装置や、リヤカーを改造して作られるユニークな移動式店舗など、日本では廃棄されてしまうようなものを、別のコンテクストで利用する発想のオブジェである。ユーモアラスなアート作品の様であると同時に、経済的で環境に配慮されたリサイクル・オブジェであるそれらの例を、スライドで紹介しながら話が進んでいった。彫刻学科の学生にとってはとても興味深い内容で、皆引き込まれるように見入っていた。

次のクラスでは、隣接するリサイクリングセンターへ赴き、プラスチックごみを用いて小さなバッグを作るワークショップを行なった。この場所はアーティストのコレクティブによって運営され、プラスチックごみを用いて実際にさまざまな商品を作り販売してい

る。色とりどりのプラスチックバッグから、アイロンや型紙を使って、それぞれが思い思いのバッグを制作した。とてもユニークなカバンができ、皆大満足だった。(写真 14、15) グッドスクールに戻りしばしノンクロンした後、ジャカルタ南部の中心地にあるカフェで行われるビデオ上映に皆で向かうことになった。グッドスクールで知り合ったフランス人アーティストの新しい作品の紹介であり、グッドスクールのメンバーたちも合流するという。上映場所のある地域はジャカルタでも人が多く集まる都会的な地域であり、飲食店や商店が遅くまで空いている。夕食を済ませた後、Block M という場所での上映会(写真 16)に皆集まつた。グッドスクールやルアンルパのメンバーなども皆来ている。ビデオは文化人類学的でありながら、とても臨場感あふれる編集方法で作られた大変面白いもので、夜遅くなり皆疲労も増したが、とても有意義な経験だった。



写真 13 Spatial Project の講師陣

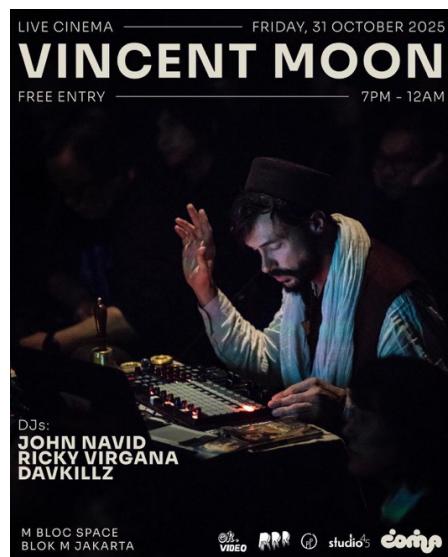


写真 16 Block M での上映会



写真 14、15 プラスチックバッグの制作ワークショップの様子

・11/2 ジャカルタアートツアー

ジャカルタ・アートシーンを1日で周るプログラムを、グッドスクールからの推薦も組み混み事前に予定を立てていた。インドネシア在住の日本人アーティスト本間メイさんに同行してもらい、朝ホテルから車2台で出発した。行程は下記の通りである。

- 1、ジャカルタ・ヒストリー・ミュージアム、ファタヒラ広場
- 2、パンコラン中華街散策の後ランチ
- 3、ギャラリービル (RUBANAH underground hub, 他三件のギャラリー)
- 4、骨董通り
- 5、サリナデパート
- 6、ROH Gallery
- 7、ARA Contemporary Gallery
- 6、Otten Coffee(インドネシア・コーヒー豆の販売所)
- 7、アートスペース dia.lo.gue
- 8、夕食@NOB coffee and eatery

最初に訪れた歴史博物館は、インドネシアの歴史が網羅できる内容で、特に植民地時代の歴史が系統立てて理解できる（写真16）。特にオランダ統治時代の家具や備品が多く、日本による統治は期間が短かったせいかあまり語られていなかった。

その後17世紀オランダ統治時代に形成された中国人コミュニティ、パンコラン中華街に移動し、昔ながらの漢方薬屋（写真17）やレストランが軒を並べている街を散策した後、ランチを取った。

ランチ後は非営利の画廊 RUBANAH underground hub(写真18)が入っているギャラリービルを訪れ作品鑑賞をした後、徒歩で骨董通りに向かい、様々なアンティックやその中に紛れた日本統治時代の硬貨や備品も見てまわった。その後、近くのサリナデパートに寄りバティック布などインドネシアの名産品を見学する。

再び車に乗りふたつの大きなコマーシャルギャラリーを訪問する。最初に訪れたのは ROH Gallery（写真19、20、21）で、中国人女性アーティスト Stella Zhong (1993-) の個展が行われていた。建築的な要素がある彫刻作品でとても印象深い展示だった。次に訪れたのは ARA Contemporary Gallery（写真22）で、タイ人女性アーティスト Alisa Chunchue(1991-) の Wunds(傷口)と名付けられた個展が行われており、こちらも大変興味深かった。双方とも90年代生まれの若手作家であり、学生にとっては大変刺激となる内容であるが、たまたまであるが、インドネシア・アーティストの発表ではなかった。

その後インドネシア産コーヒーを扱う Otten Coffee に寄ったのち、感じのいいカフェやアートショップを併設したスペース dia.lo.gue で展示を鑑賞、夕食を取るレストランへと向かった。



写真16 インドネシア・ヒストリー・ミュージアム



写真17 パン粉ラン中華街の漢方薬屋



写真18 RUBANAH underground hub



写真22 ARA Contemporary Gallery



写真19、20、21 ROH Gallery



・11/3 グッドスクール最終日

昼食をとりながらノンクロンしていると、現代美術展覧会の展示に多く携わっているというインストラクターによるクラスが始まった（写真 23）。とても気さくに学生達に作品展示の機微について話を進め、複数のフレームを均等に展示する時の計算方法や、フレームの高さの合わせ方などを、ワークショップ形式で行なった。その後ブレイクを挟んで、コラージュのワークショップが始まった。たくさんの雑誌が持ち込まれ、それぞれが A4 紙の表裏両方に自由テーマでコラージュをするのだが、最後に全員の作品を綴じて小冊子を作るという。コラージュの素材は 80 年代インドネシアの様々な雑誌群で、レトロな内容で大変面白く、皆熱中して制作した（写真 24）。コラージュができると、冊子を制作するためにスタッフが取り組み、その待ち時間 1 時間半ほどの間にこれまでグッドスクールで学んだことについて皆で共有する時間を持った。冊子が完成し皆に一部ずつ手渡されると、それぞれの A4 コラージュが半分に折られて 4 ページ分となり、ランダムに組み合わされ流ことで思いがけない組み合わせが加わり、より面白い内容となっていた。一人ずつの作品としても興味深かったが、冊子になることで、意味が可変することを皆が納得した。そうこうしているうちに最終日の夕食準備が整い、皆でご飯を食べながら名残を惜しみ会話が弾んだ。



写真 23 設営のクラス

写真 24 コラージュ・ワークショップ

・11/4 ジャカルタツアー、及び帰国

インドネシア最終日、ホテルを 10 時半に出発する送迎車を事前にアレンジしている。インドネシア国立美術館（写真 25）とアジア一大きいと言われるイスティクラ大モスク（写真 26）を見学し、ショッピングモールでご飯を食べてから空港へ向かう予定が組まれている。

国立美術館では、事前に連絡を取っていた学芸部長の方とお会いして、ご好意で入場をさせていただいた。コレクションの中にはインドネシアの現代美術も多く含まれており、11/2 にインドネシアの現代美術作品を見ることがなかったこともあり、得るものが多い内容であった。イスティック・モスクでは皆がスカーフを被り、ツアーガイドに内部を案内してもらう。興味深いのは、このモスクのデザインはキリスト教徒である建築家によって

行われたという話である。またモスクのそばにはカトリック教会も建造されており、インドネシアにおけるイスラム教のあり方が寛容であることが窺えた。モスク内は厳格でありますが、人々が昼寝をしていたり、ご飯を食べたり、写真を撮ったりと楽に過ごしている様子で、広場のような雰囲気だと思った。その後、ジャカルタで一番大きいと言われるグランド・インドネシア・ショッピングセンターに立ち寄り、ご飯を食べてから空港へ向かった。東京へは定刻通りに飛行機が出発した。



写真 25 インドネシア国立美術館の参加型展示



写真 26 イスティクラ大モスク

・11/5 羽田到着

早朝羽田に到着してから解散。

<インドネシアでの国際交流プログラムを終えて>

公共交通機関の発達が遅れているインドネシアは、何処に行くにも車のアレンジをしなければならず、いろいろ手間がかかる場所である。しかし道ゆく人々は楽しげで、東京よりも明らかに幸福度が高いように見受けられた。旅のアレンジは大変で苦労も多かった研修だが、日本に戻るや否や、懐かしくて戻りたいと思う場所である。学生達は皆、「また行きたいなあ」と口々に言っている。

インドネシアの現代美術は、共同作業や社会問題への言及が強く感じられ、同時に、ユーモアのセンスや制作行為の楽しさが強く表出していた。グッズスクールで経験したクラスは、こういったドキュメンタ 15 で見たルアンルパ思想が強く現れていると思い、とても面白かった。今回の国際交流の体験から、今後、学生たちが欧米中心のアートシーンを疑問視し、自分たちの方法論を模索する契機となることを願っている。